

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380945

研究課題名(和文)自殺リスク評価の観点からみた臨床心理検査の相互関連性

研究課題名(英文) Interactional relationship among psychological tests from the perspective of suicide risk assessment

研究代表者

水野 康弘 (Mizuno, Yasuhiro)

帝京大学・医学部・教務職員

研究者番号：60646701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自殺リスクの観点から精神科臨床で日常的に使用される臨床心理検査間の関連性を検討し、さらに検査後の自殺関連行動と照合することで、自殺リスクの評価に際して着目すべき検査変数を明らかにすることを目的とした。

その結果、自己評価式抑うつ性尺度の「希死念慮の頻度を示す19番目の質問項目の得点」、文章完成法の「刺激語 - 自殺への記述内容」、風景構成法の「通常あまり使われない色による彩色」、ロールシャッハ法の「特殊指標 - 自殺の可能性一部の下位変数への該当」が、自殺リスクの評価において寄与する可能性が示された。精神科臨床で、これらの変数に着目することが自殺予防につながるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to investigate relationships among psychological tests from the perspective of suicide risk assessment, in order to identify test variables valid for predicting suicide-related behaviors.

The main results indicated the importance of a higher frequency of suicidal ideations for the 19th question of the Self-Rating Depression Scale, responses to the word "suicide" on the Seikenshiki Sentence Completion Test, the "other" colors that are not normally used in Landscape Montage Technique painting and sub-variables of the Suicide Constellations in the Rorschach Comprehensive System. These variables were predictive of suicide risk, and were practically useful for suicide prevention in clinical psychiatry.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理検査 自殺 風景構成法(LMT) 自己評価式抑うつ性尺度(SDS) 文章完成法テスト(SCT) 包括システムによるロールシャッハ法

1. 研究開始当初の背景

本邦の自殺者数は、1998年に前年からの急増(8,261人;35.1%)により3万人を超えた。2011年に3万人を切ったものの、2012年は2万7,858人(内閣府,2013)と、まだ高水準が続いている。

自殺の危険因子は、これまでの研究で多数の要因が挙げられている。1)個人因子としては、過去の自殺企図、精神疾患、アルコールまたは薬物の乱用、社会的支援の欠如、トラウマや虐待の経験、急性の心的苦痛、大きな身体的または慢性的な疾患などが挙げられ、2)社会文化的因子としては、支援を求めることへのスティグマ、ヘルスケアへのアクセスの障害、自殺行動(メディアを通じたものも含む)や自殺者の影響への曝露など、3)状況的因子としては、失業や経済的損失、関係性または社会性の喪失、自殺手段への容易なアクセス、ストレスの大きいライフイベントなどである(日本精神神経学会,2013)。

1)の個人因子のなかでも精神疾患については、自殺既遂者の90%以上が何らかの精神疾患をもつことが知られており、精神科臨床において、自殺のリスク評価は自殺既遂を防ぐ上で極めて重要な位置を占めている。しかし、通常、希死念慮や自殺念慮は、医療者が患者への問診などを通して確かめるが、限られた時間で多数の患者を治療せざるをえない日本の医療現場の現実があり、これらの念慮が十分に確認できるとはいえない。

この状況を補完する方法のひとつとして、自殺の危険性を予測する評価尺度を使用することが考えられる。既に、自己記入式のもの(Beckら1974,Plutchikら1989)や、第三者評価によるものなどが開発されている(Beckら1974,Lettieriら1974,Mottoら1985)。しかし、自殺の危険性を予測する評価尺度が精神科患者に適用されるのが常とはいえない。その理由として、日本語版作成や妥当性の検証といった研究上の課題とともに、診療保険点数の対象でないことなどが挙げられよう。

日常の精神科臨床では、鑑別診断の補助、病態水準の把握、パーソナリティ傾向、認知の歪みなどが把握できる臨床心理検査、それも診療保険点数が認められている臨床心理検査が主に実施されている。また、検査実施の際に、1つの検査だけが実施されることはむしろ少なく、複数の検査を実施することで(検査バッテリーという)、多角的かつ多層的に対象者の心理特性を評価している。

このように日常的に用いられている臨床心理検査から自殺リスクの評価が的確に行えるようになれば、自殺予防に寄与するものと考えられる。

ところが、残念なことに、複数の心理検査結果を統合して患者の全体像を描き出すという肝心の部分において、自殺のリスク評価に関して検査間の相互関係について確実な知見は得られていない。その理由は、先行研

究の結果に不一致が認められたということではなく、個々の検査に関する研究は多数積み上げられているものの、日常的に実施されている臨床心理検査間の相互関連性を、自殺リスクの観点から検討するような研究が行われてこなかったことによる。こうした背景のなかで、研究代表者らは一部の心理検査間の相互関連性について、すでに検証研究を実施してきた(水野ら,2010.水野ら,2011.有木ら,2012.水野ら,2012)。

2. 研究の目的

精神科臨床で日常的に使用されている臨床心理検査間の相互関連性を自殺リスクの観点から検討する。さらに、検査実施後に実際に自殺企図を含む自殺関連行動を行った事例に関する調査を加え(臨床的妥当性)、自殺リスクの評価に際して着目すべき臨床心理検査の変数を明らかにすることを本研究の目的とする。

なお、本研究は帝京大学倫理委員会の承認を得ている。

3. 研究の方法

2007年9月から2015年2月までの間に、帝京大学医学部附属溝口病院精神神経科外来を受診した患者のうち、通常臨床業務の一環として個別に臨床心理検査を実施した者を対象とし、その検査結果および受検後の自殺関連行動の有無を主たる解析変数とした。なお、本研究で取り上げた臨床心理検査は、Zungによる自己評価式抑うつ性尺度(以下、SDS)、文章完成法(以下、SCT)、風景構成法(以下、LMT)、包括システムによるロールシャッハ法(以下、Ror.)の4種である。

(1)平成25年度

自殺リスクの観点から、臨床心理検査の結果間の関連性について検証を行った。

具体的には、98例の臨床心理検査データに関して以下の¹⁾を行い、また²⁾も行った。

LMTの構成(風景全体の構成の割合)・彩色(風景全体に施された彩色の程度)・色名(各描画アイテムの彩色に使用された色の名前)とSDSの総得点(全体的な抑うつの程度)および19番目の質問項目の得点(希死念慮の頻度)との関連性を統計的に検証した。

LMTの構成・彩色・色名とSCTの刺激語「自殺」および「死」に対する記述内容との関連性を統計的に検証した。

76例の臨床心理検査データを用いて既に統計的な検証を終えていた、LMTの構成・彩色・色名とRor.の特殊指標 自殺の可能性(Suicide-Constellation:以下、S-CON)の該当数およびそれを構成する12の下位変数との関連性について、その研究結果を学術大会にて発表した。

(2)平成26年度

前年度に引き続き、臨床心理検査データ間の関連性について検証を行った。

具体的には、87例の臨床心理検査データに関して以下の を行い、また も行った。

Ror. のS-CONの該当数および12下位変数とSDSの総得点および19番目の質問項目の得点との関連性を統計的に検証した。

Ror. のS-CONの該当数および12下位変数とSCTの刺激語「自殺」「死」の刺激語に対する記述内容との関連性を統計的に検証した。

平成25年度の成果である、LMTの構成・彩色・色名とRor. のS-CONとの関連性についての研究結果を論文化し、専門学術誌に投稿した。

(3)平成27年度

最終年度は、これまでに得られた自殺リスクに関する研究結果と、自殺既遂および未遂といった自殺関連行動に関する対象者の予後データとを照合した。これにより、これまでの研究結果が実際の事例に適応されるのかという臨床的妥当性について検討し、臨床で活用できる自殺リスクに関する検査変数を見出すことを試みた。

具体的には、以下の を行った。

4種の臨床心理検査バッテリーの結果(治療開始直後と治療終了直前の2回で同じ検査を実施)および治療経過について、自殺関連行動を有するうつ病患者を対象に事例研究を行った。

76名の臨床例において、臨床心理検査受検後1年以内の自殺関連行動の有無から、SDSの19番目の質問項目得点およびSCTの刺激語「自殺」に対する記述内容にみられる特徴について、統計的手法を用いずに後方視的に検討を行った。

臨床心理検査受検後1年以内の自殺関連行動の有無が追跡可能であった40例のうつ病者について、S-CONの該当数・12下位変数の実数・VistaおよびMORのコードが付けられた反応の内容にみられる特徴について、統計的手法を用いて後方視的に検証した。

4. 研究成果

(1)平成25年度 成果

当該年度に実施した3つの研究により、以下の成果を得た。

LMTとSDSの関連性を検証した結果、LMTにおいて「石」を灰色で彩色した者が、黒色で彩色した者や無彩色の者よりも、SDSの19番目の質問項目において高い希死念慮の頻度を示した。しかし、この結果は研究代表者らによる先行研究の結果と不一致であり、臨床実感とも異なるものであった。

LMTとSCTの関連性を検証した結果、両者間に関連性は認められなかった。

なお、この結果は、LMTとSCTの分類法や分析方法といった研究方法の問題が影響している可能性が考えられた。したがって、この問題点を改善できる分類法や分析方法を検討したうえで、改めて両者の関連性について検証を行う必要があるという今後の課題が見出された。

LMTとRor. のS-CONとの関連性を検証した結果、LMTの一部のアイテムの「通常あまり使われない色による彩色」がRor. のS-CONを構成する一部の下位変数と関連していた。このことから、LMTの通常あまり使われない彩色に注意することが自殺の危険性をみつけるために役立つ可能性が示唆された。

(2)平成26年度 成果

当該年度に実施した2つの研究により、以下の成果を得た。

Ror. のS-CONとSDSの関連性を検証した結果、S-CONの該当数とSDSの総得点の間には関連性は認められず、SDSの19番目の質問項目の得点と有意な関連が示された。さらに、S-CONの一部の下位変数は、SDSの19番目の質問項目の得点「2点(ときどき)以上」と関連していた。このことから、SDSを用いた自殺のリスク評価に際しては、総得点に示される全体的な抑うつ程度よりも、19番目の質問項目に示される希死念慮頻度(特に2点「ときどき」以上の頻度)に着目することが重要であることが示唆された。

Ror. のS-CONとSCT刺激語「自殺」および「死」の記述内容との間には、有意な関連性が認められなかった。この結果の理由として複数の要因が考えられるが、SCTの記述を数量的に扱う先行研究が少ないため、本結果の解釈は慎重を要するものと考えられた。したがって、SCTの分類法や分析方法に関する今後の課題が再度、指摘された。

(3)平成27年度 成果

当該年度に実施した3つの研究により、以下の成果を得た。また、の成果も得た。

頻回な自殺関連行動を繰り返すうつ病者の事例研究において、治療開始直後に実施した臨床心理検査バッテリーの結果は、これまでに統計的な検証によって得られた各臨床心理検査の自殺リスクを示す特徴についての知見と一致していた。

加えて、治療開始直後の検査結果より、本事例に内省を促す心理療法を行うことは、かえって解離を伴う自殺関連行動を誘発する危険性があることも予測され、この点を踏まえた支援計画の実施により、その後、事例の自殺関連行動および抑うつ症状は消失した。そして、治療終了直前に再実施した臨床心理

検査バッテリーの結果では、自殺のリスクを示す特徴が消失していた。本事例研究により、自殺リスクを評価できる検査変数への着目、それに基づく支援計画の策定、再検査による客観的評価といった臨床心理検査の有用性が再確認された。

臨床心理検査受検後1年以内の自殺関連行動の有無から、SDSおよびSCTにみられる特徴を検討した結果、自殺関連行動を呈した者の多数がSDSの19番目の質問項目で「3点(かなりのあいだ)」以上の希死念慮の頻度、あるいはSCTの刺激語「自殺」に対して「自殺を肯定したり自殺に親和的な」記述のいずれかを示した。さらに、この2つの条件をともに満たした者は、受検後1年の追跡期間中に複数回の自殺関連行動を示していた。このことから、自殺のリスク評価に際して、SDSの19番目の質問項目の得点、およびSCTの刺激語「自殺」の記述内容に着目することの重要性が確認された。

臨床心理検査受検後1年以内の自殺関連行動の有無から、Ror.のS-CONにみられる特徴を検証した結果、自殺関連行動を示した群は、それを示さなかった群に比べて、S-CONの12下位変数のひとつである「es>EA」に該当する者が有意に多かった。また、contentに関して、自殺関連行動を示した群は「人間反応に付されたMOR」を示す者が有意に多く、さらにそれにBI反応が加わる傾向を認めた。本研究により、自殺のリスク評価におけるS-CONの下位変数に着目することの有用性が確認されたと共に、contentにも目を向けることの重要性も示唆された。

平成26年度中に査読審査を受けていたLMTとRor.のS-CONとの関連性に関する投稿論文が、専門学術誌に受理・掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

水野康弘・有木永子・浅川けい・北島正人・津川律子・張賢徳(2015). 自殺のリスク評価からみた包括システムによるロールシャッハ・テストのSuicide Constellation(自殺の可能性)と風景構成法との関連性 精神科患者76例を対象として. 臨床心理学 15(6). 763-771. (有査, 原著)

北島正人・水野康弘・有木永子・浅川けい・津川律子・張賢徳(2014). 風景構成法(LMT)と自己評価式抑うつ性尺度(SDS)および文章完成法テスト(SCT)との関連. ~LMTにおける構成の型と色彩の程度・種類に着目した自殺のリスク評価~. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 36, 193-203. (有査)

[学会発表](計 6件)

Yasuhiro Mizuno, Masato Kitajima, Nagako Arika, Kei Asakawa, Ritsuko Tsugawa, Yoshinori Cho. Rorschach Characteristics of Patients with Major Depression Who Exhibited Suicide-Related Behavior after Initiation of Outpatient Psychiatric Treatment ~ Focus on the Suicide-Constellation of the Rorschach Comprehensive System ~. 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, 18/05/2016, Tokyo Convention Hall (Tokyo, Japan).

水野康弘・北島正人・有木永子・浅川けい・津川律子・張賢徳. 自己評価式抑うつ性尺度(SDS)および文章完成法(SCT)において自殺関連行動前に見られる特徴. 日本精神衛生学会 第31回大会, 2015/12/5, 産業医科大学 ラマツイーニホール(福岡県・北九州市).

水野康弘・北島正人・有木永子・浅川けい・津川律子・玄東和・張賢徳. 交際相手の事故死を契機に頻回の自傷行為を呈したうつ病女性の事例 - 自殺のリスク評価と治療計画の策定における心理検査バッテリーの有用性. 日本自殺予防学会 第39回大会, 2015/9/12, 青森県立保健大学(青森県・青森市).

水野康弘・有木永子・浅川けい・北島正人・津川律子・張賢徳. S-CONに示される自殺のリスクとSDSおよびSCTとの関連. 包括システムによるロールシャッハ学会 第20回大会, 2014/5/18, 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都).

北島正人・水野康弘・有木永子・浅川けい・津川律子. SDSと風景構成法との関連性の検討 ~構成の型と色彩の程度に着目して~. 日本心理臨床学会 第32回大会, 2013/8/26, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市).

水野康弘・有木永子・浅川けい・北島正人・津川律子. SCTと風景構成法との関連性の検討 ~構成の型と色彩の程度に着目して~. 日本心理臨床学会 第32回大会, 2013/8/26, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 康弘 (MIZUNO, Yasuhiro)
帝京大学・医学部・教務職員
研究者番号: 60646701

(2) 研究分担者

有木 永子 (ARIKI, Nagako)
東洋学園大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 40319611

北島 正人 (KITAJIMA, Masato)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：30407910

津川 律子 (TSUGAWA, Ritsuko)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号： 90349944

張 賢徳 (CHO, Yoshinori)
帝京大学・医学部・教授
研究者番号：00297136

(3)研究協力者

浅川 けい (ASAKAWA, Kei)
菱沼クリニック・臨床心理士